

巻頭言

■ 薬学部創立100周年に向けて



徳島大学薬学部長

土屋浩一郎

Tsuchiya Koichiro

新型コロナウイルス感染症が第5類に移行したことにより街はコロナ禍前の風景が戻りつつあります。しかし大学病院を持つ蔵本地区では、病院実習・薬局実習の学生ではマスク着用が継続されており、完全な日常に戻るにはもう少しばかりかかるようです。

さて、徳島大学薬学部は長井長義博士が1922年に、製薬業の盛んな徳島県に製薬技術者養成機関を設立することに奔

走された結果、我が国唯一の工業系薬学として徳島高等工業学校内に製薬化学部を設置されたことに始まりました。設置の翌年から学生を受け入れた（最初は22名）ことで今年が丁度100年目となることから、11月3日に記念式典、記念講演会、そして記念祝賀会を開催することとし、学部に「徳島大学薬学部創立100周年記念事業実行委員会」を置いて準備を進めています。その過程で古い資料に接する機会があったことから、薬学部の歴史について振り返ってみたいと思います。

薬学部（最初は徳島高等工業学校応用化学科製薬化学部）は発足当時から昭和25年までは工学部薬学科1科（製薬化学部）だけでしたが、昭和27年には7研究室、昭和45年には13研究室、平成4年には医薬創製教育研究センター設立に伴い16研究室、そして現在は協力講座を含め21研究室で構成されています。この間に薬学を取り巻く環境の変化に対応すべく昭和37年に製薬化学科が増設されて2学科になり（定員80人）、昭和40年には大学院が設置されました。最近では薬剤師養成課程が6年に延長されたことに伴い平成18年には6年制の薬学科と4年制の創製薬科学科に改組し、さらに令和3年度からは、

6年制1学科になり、これまでに学部・大学院合わせて約8千人（延べ人数）の卒業生を送り出してきました。

徳島大学薬学部はその創設の精神から伝統的に有機成分野の研究が盛んですが、実際、昭和27年の7研究室のうち3研究室は有機系であり、現在までその流れを引き継いでいます。ところで令和5年度に7研究室にルーツを持つ3つの研究室が協力して医歯薬学研究部にDDS研究センターを立ち上げました。このセンターでは、薬物の送達にかかる研究、薬物動態の制御に係る研究、そして薬物の免疫制御に係る研究を3つの柱として、国内外の研究者・研究施設と協力しながら、日本のそして世界のDDS研究の拠点となること、それと同時に、世界で活躍できるDDS研究者の育成を目指していきます。

薬作りの要素としては、ドラッグデザイン、合成、体内動態評価、製剤技術、そして有効性・安全性評価が挙げられますが、このたびのセンターの設置に伴い、徳島大学薬学部では幅広くこれらの領域をカバーできる体制が整ったと考えています。

薬学部の理念として「薬学が関係する諸分野の連携を基盤に、自らの活躍の場を積極的に開拓できる能力に溢れた人材「インタラクティブYAKUGAKUJIN」の育成」を掲げていますが、“志”あるインタラクティブYAKUGAKUJINの輩出を推し進めるため、さらなる体制を整備しながら次の100年に向けても力強く歩んでいく所存です。今後とも一層のご支援、ご高配を賜りますようお願い申し上げます。



100年前の開校式の写真

先導的薬剤師育成コース長より



薬学科長
先導的薬剤師育成コース長

石田 竜弘

Ishida Tatsuhiro

先導的薬剤師育成コース長（薬学科長）の石田竜弘です。令和3年度入学生より「薬剤師資格を基盤とする薬学部新6年制課程」に移行し、薬学部の理念である「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」の養成を推し進めています。高度な研究や先端的な治療法がわかり、リーダーとして活躍できる薬剤師の輩出を目指し設置されたのが「先導的薬剤師育成コース（定員50名）」です。このコースは、研究実践能力を備えた薬剤師として先進医療分野に創造的な取組ができる人材の育成を目指した「研究型高度医療薬剤師プログラム（定員40名）」

と、研究実践能力を備えた薬剤師として地域医療分野に創造的な取組ができる人材の育成を目指した「研究型高度医療薬剤師プログラム（定員10名（学校推薦型選抜Ⅱ合格者5名含む）」からなっています。本年度より第一期生（3年生）がコース決定し、研究室配属と同時に、新たな学びを開始しました。薬学部では3年次進級時のコース選択に役立つ、多彩かつ特徴的な講義や実習を用意していますので、1、2年生は主体的に取り組み、今後の進路を選択していただく

創製薬科学研究者育成コース長より



創製薬科学科長
創製薬科学研究者育成コース長

小暮 健太郎

Kogure Kentaro

創製薬科学研究者育成コース長の小暮健太郎です。このコースは、「医療を理解し、創薬・製薬に貢献できる薬学研究者・教育者を育成する」ことを目的として、徳島大学薬学部の使命である創薬研究者育成のために創設されました。創製薬科学研究者育成コース（創製薬科学研究者育成プログラム）は、創薬研究者育成のために独自のユニークな科目を設けており、3年生進級時に研究室配属されてから6年生で学外実務実習に出るまでの期間、卒業研究に打ち込むことが可能です。昨年度末に、初めての育成プログラム選択が実施され、27名が第一期生となり、現在卒業研究に取り

組んでいます。5年生の9月に2年半の研究成果を卒業研究発表会で発表することが予定されています。彼らの中から、PhD-Pharmacist プログラム（こころざしプログラム：学部4年終了後に大学院博士課程（4年）に進学し、博士（薬学）の学位を所得後、学部5年次に戻り薬剤師免許の取得を目指す特別選抜プログラム）に進学する学生が出てくると期待しています。新入生は、2年後にコース・プログラムを選択することになりますが、1・2年生の間に様々な経験を積み多くの知識を得ることで、なりたい自分を見つけてください。

DDS 研究センターの設置

DDS 研究センター長

小暮 健太郎

Kogure Kentaro

令和5年4月1日、医歯薬学研究部に DDS 研究センターが設置されました。薬物送達システム（Drug Delivery System：DDS）は mRNA 医薬などの作用発現に不可欠ですが、未だ開発の余地が残されています。徳島大学薬学部には DDS 研究者が多く在籍していることから、我が国発の革新的 DDS 開発を目指して、DDS 研究の集約と国内研究者・製薬関連企業との連携のため

の拠点形成を目的として本センターが設置されました。本センターは、「送達技術開発部門」「薬動力学部門」および「免疫応答制御部門」から組織されています。「送達技術開発部門」はナノテクノロジーを基盤としたペプチド・オリゴヌクレオチド等のモダリティに最適な送達技術の開発研究を、「薬動力学部門」は生体内における物質動態制御機構の解明に基づく新たな DDS 担体やルートの開拓研究を、「免疫応答制御部門」は mRNA ワクチンでも問題となっている送達担体やモダリティ、添加物等による望まれない免疫応答を制御するための技術開発研究を行います。5月26日（金）

に、キックオフシンポジウムを開催し、教員・学生、多くの製薬企業様など84名の方にご参加いただきました。今後も、定期的にシンポジウムや勉強会などを実施していく予定です。



キックオフシンポジウムの様子

研究紹介

DDS技術を利用して新しい抗体を作り出す



薬物動態制御学分野 准教授

安藤 英紀

Ando Hidenori

私は、これまで約12年間、ドラッグデリバリーシステム（DDS）に関する研究を一貫して進めており、DDS研究を基盤として異分野融合による新領域の展開とそれによる新しいバイオ医薬品の創出を目指し、日々研究に没頭しています。本稿では、所属研究室で独自に開発した免疫技術を利用した抗体誘導法について紹介します。

抗体関連製品（抗体医薬、診断薬、研究用抗体試薬、等）を開発する上で重要となるのが、プロトタイプとなるモノクローナル抗体の製造です。近年の遺伝子改変技術の進歩に伴いその製造プロセスも多様化していますが、特にマウスやウサギ等の実験動物に抗原

を投与して生体内の免疫機構を利用して抗体を誘導することで、生理活性の高い抗体を誘導することができるとされています。現在実用化されている免疫技術は、抗原とアジュバントのエマルジョンを調製し、この皮下投与を複数回繰り返す皮下免疫のみですが、抗体を誘導するのに長い免疫期間を要する、多様性のある抗体を誘導することが難しい、膜タンパクなどの高次構造が重要な抗原に対する抗体誘導が困難などの課題もあります。

我々は以前、リポソームを用いた抗がん剤デリバリーの研究を行う中で強力な抗原提示細胞として注目されている脾臓辺縁帯B細胞（MZ-B細胞）に直接抗原を送達できる技術（脾臓免疫技術）を開発しています。MZ-B細胞は合成高分子のポリエチレングリコール（PEG）を認識するIgMを提示しており、PEG修飾リポソームを投与（1回目投与）することで活性化され、抗PEG-IgMを分泌します。その後抗原を封入したPEG修飾リポソームを投与（2回目投与）すると、抗PEG-IgMがPEG修飾リポソームと結合し、補体系を活性化させます。その後、補体受容体を有したMZ-B細胞がこれを取り込むことで、抗原が脾臓に直接送達されます。抗原を取り

込んだMZ-B細胞は、その後T細胞領域と近接する濾胞領域に移動し、形質細胞への分化誘導を促進することで、抗原特異的IgG抗体を分泌します（図）。この脾臓免疫は、従来の皮下免疫と比較して優位性が高く、例えばモデル抗原としてオボアルブミン（OVA）を用いた検討において、免疫期間を1/2～1/3程度に短縮することができ、ポリクローナル抗体としての抗体価を25倍ほど高く誘導することができます。また、脾臓免疫で誘導できるIgGサブクラスも皮下免疫と比較して多く、多様性の高い抗体遺伝子を誘導可能であることも証明しています。

最近膜タンパクに対する抗体誘導にもチャレンジしています。膜タンパクに対する抗体医薬は市場価値が非常に高く、承認済の抗体医薬品の内、60%以上が膜タンパクに対するモノクローナル抗体です。ヒトゲノム中にコードされている膜タンパクの種類はおよそ5,000種類以上であり、いずれも生体内で高い機能性を有していることから、抗体創薬の標的として高いポテンシャルを秘めています。しかしながら、膜タンパクを標的として承認された抗体医薬品は、一回膜貫通型に対して42品目、複数膜貫通型に対しては僅か8品目であり（2019年調査）、膜タンパクに対する抗体創薬の基盤構築には技術革新が求められています。一方、我々の開発した脾臓免疫では、脂質二重膜のリポソームをキャリアとして用いるため、リポソーム膜上に膜タンパク抗原を再構成することで、アクティブな構造を維持した状態で膜タンパク抗原を脾臓に送達可能であり、それによってこれまで得られなかった抗体を誘導できることを期待して、現在評価を進めています。また、膜タンパクの生体由来キャリアとして細胞外微粒子であるエキソソームを用い、新たな脾臓免疫技術の開発にも取り組んでいます。

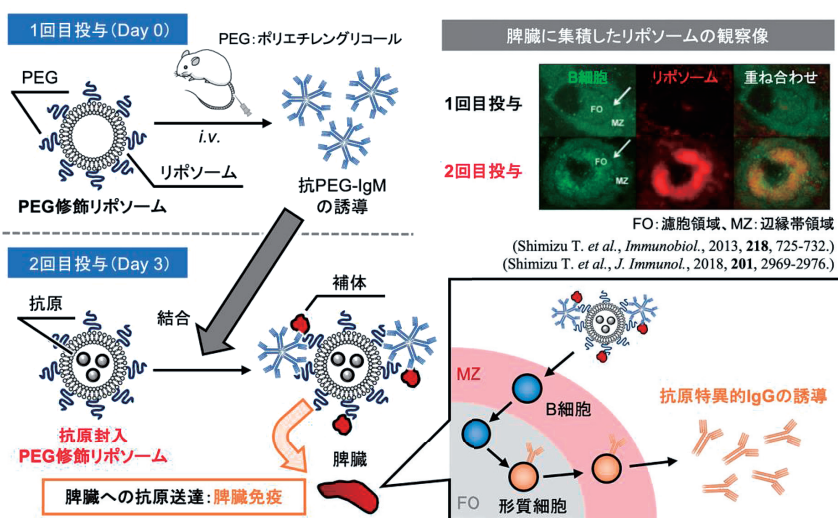


図 脾臓免疫技術の概念図

新任教員挨拶



臨床薬学実務教育学分野 助教

川田 敬

Kawada Kei

令和5年4月1日付けで、大学院医歯薬学研究部臨床薬学実務教育学分野（阿部真治教授）の助教として着任いたしました川田敬（かわだ けい）と申します。私は2003年に長崎大学卒業後、同大学博士前期課程を経て、2005年4月より鹿児島共済会南風病院、2007年4月より高知医療センター、2019年2月より高知大学医学部附属病院の薬剤師として長らく臨床実務に携わって参りました。また2023年に高知大学大学院博士後期課程を修了いたしました。今後は、これまでの薬剤師業務経験をもとに本学部が目指す先導的薬剤師の育成に貢献できるように精一杯取り組む所存です。ま

た現在、私は実臨床での薬物療法の問題点について臨床研究、基礎研究、医療ビッグデータ解析といった複数の視点からアプローチを行う研究を行っており、学生への研究指導を通じ、リサーチマインドを持って医療現場で働くことができる薬剤師の育成に全力を尽くしたいと思います。以上のように、医療現場で必要とされる知識および技能を兼ね備え、さらに強いリサーチマインドを有したインタラクティブYAKUGAKUJINの養成に取り組んでいきたいと考えておりますので、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



臨床薬学実務教育学分野 助教

山本 高成

Yamamoto Takaaki

令和5年4月1日付けで、大学院医歯薬学研究部臨床薬学実務教育学分野の助教として着任いたしました山本高成と申します。私は2008年に徳島文理大学薬学部を卒業後、同大学大学院薬学研究科修士課程に進学し2010年に修了いたしました。2010年4月からは香川大学医学部附属病院薬剤部に薬剤師として採用され、2018年には香川大学大学院医学系研究科博士課程を修了し社会人大学院生として医学博士を取得いたしました。これまで13年間臨床業務に携わり、薬剤部内において病棟業務やTDM業務、薬剤師教育に従事するとともに、感染制御部においてAST（Antimicrobial Stewardship Team）・

ICT（Infection Control Team）活動に従事しました。そのため、病院薬剤師時代からの研究テーマである抗菌薬バンコマシン投与設計の最適化に関する臨床研究を継続して行っております。今後、徳島大学薬学部においては、これまでの臨床業務・臨床研究経験を基に、専門的な薬物療法に関する講義・実習およびTDM研究の実践・指導を通じて、指導・研究能力を有する先導的薬剤師を養成したいと考えております。これからも薬学部の先生方からご指導ご鞭撻を賜りながら、薬剤師養成教育や臨床研究、OSCE等の管理・運営に全身全霊で取り組む所存です。何卒よろしく願いいたします。

退任教員挨拶



創薬生命工学分野 教授

伊藤 孝司

Ito Koji

私は、1999年9月より、徳島大学薬学部附属医薬資源教育研究センター・環境生物学・教授として赴任いたしました。当時、植物資源学・宍戸宏造教授、海洋資源学・楠見武徳教授方が天然物の有機合成、海洋生物からの抽出・構造決定を中心に有機化学研究を進めておられましたが、私共の、希少難病（リソソーム病）の病態生化学や遺伝子工学に基づく治療法開発等の異分野研究を受け入れてくださり、また緩やかに連携しながら、ユニークなセンターの教育研究活動を実践できました。国立大学法人化、6年制導入など薬学部を取り巻く状況が

大きく変動し、センター・研究室の名称も、大学院薬科学教育部、さらに薬学研究科附属医薬創製教育研究センター・創薬生命工学分野に変わる中、生物有機化学分野・南川典昭教授、有機合成薬学分野・難波康祐教授方のご協力を得て、アカデミア創薬への展開を目指す教育研究活動を通じて、力量ある創薬・育薬研究者育成に、微力ながら貢献できたと存じます。最後に、23年7月にわたる在職中に大変お世話になりました薬学部所属の皆様へ感謝致しますとともに、新6年制体制に基づく薬学教育研究のご発展を祈念いたします。

退任教員挨拶



薬物動態制御学分野 准教授

異島 優

Ishima Yu

2023年3月末に徳島大学を退職し、この4月より京都薬科大学薬剤学分野の教授に就任しました異島 優と申します。熊本地震が起こる直前の2016年4月に熊本大学より徳島大学へ異動し、石田竜弘教授が主宰する薬物動態制御学分野の准教授に着任しました。思い返せば、新しい環境に慣れる間もなく熊本地震が発生し、母校である熊本大学の研究室の壊滅的な状況が伝わってくると、徳島大学の先生方から温かい沢山の支援が私に届き、地震による悪路の中、長時間車を運転し、熊本に物資を届けた日のことが鮮明に蘇ってきます。その後も、熊

本大学の学生への共通機器施設などの臨時での使用許可の特例措置も講じて頂くなど、次々と心温まる支援の輪が広がったこと、改めまして、深く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。このような、心温まる素晴らしい教職員や学生が集う徳島大学で7年間過ごさせて頂いた日々は、私にとって一生の宝物です。今後、京都薬科大学での教育・研究生活が始まりますが、ここまで育てて頂いた徳島大学へ少しでも恩返しができるよう、日々精進して参ります。引き続きのご指導とご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。



医薬品情報学分野 助教

山本 清威

Yamamoto Kiyotake

2023年1月をもちまして徳島大学を退職し、2月より宮崎大学に着任致します。在職中には先生方をはじめ、多くの方々に大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。特に、医薬品情報学分野の佐藤陽一教授には、大学教員として必要な多くのことを学ばせていただいたことに感謝申し上げます。大学院生時代にご指導いただいた佐藤先生の研究室で助教として働くことができるとは全く想像しておらず、佐藤先生はもちろん医薬品情報学分野の学生と研究室生活を過ごせたことは大変貴重な経

験をさせていただきました。また、若手の先生方とは一緒に仕事をさせていただく場面が多くありましたが、新参の私にもご丁寧にご指導いただき、先生方を見習って自分も同様に指導していかなければならないと襟を正される思いでした。2月からは全く新しい環境で研究を開始することになります。徳島大学薬学部で学んだことや得た経験を活かして宮崎大学でも精進して参ります。今後とも何卒ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願ひ申し上げます。短い間ではございましたが、本当にお世話になりました。

薬学部附属薬用植物園では、果樹園、樹木園、西洋薬園、漢方薬園、ハーブ園、民間薬園など、12のテーマ区画に日本薬局方収載生薬の基原植物、国内外の薬用植物ならびに絶滅危惧種等を栽培しています。

近年、徳島県勝浦町や阿南市産の岩石を調達し、複数年計画で圃場整備を進めています。第1期として、樹木を茶系の勝浦町産岩石で囲み、岩花壇を整備しました。この岩花壇には、本園で栄養繁殖した半日陰を好む植物を植え付けています。画像のスズカケソウ（ゴマノハグサ科）は鳥取、岐阜、および徳島県のみで自生する植物で、環

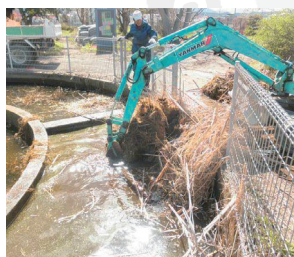
境省レッドデータブックⅠA類（ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種）の絶滅危惧種ですが、岩花壇で美しい紫色の花を付けています。

当園では例年、一般市民対象の開放を実施し好評を得ていました。ここ数

年はコロナ禍の影響により開催を見合わせておりましたが、本年は、11月はじめに開催を予定しておりますので、ぜひご来園ください。



勝浦町産岩の花壇



整備の様子



スズカケソウ

薬用植物園について

各賞授与式開催

令和5年3月23日、薬学部長井記念ホールにて、「令和4年度薬学部・薬学研究科各賞授与式」が執り行われました。今年度は3年ぶりに規模を縮小せずに開催されました。

授与式では、土屋学部長から、「…（新型コロナウイルス感染症の）パンデミックをくぐり抜けてこれたという経験は何事にも代えがたいものです。おそらく将来教科書に載るであろう事態の真只中にみなさんは大学生活を送られました。この経験を無駄にしないで、将来社



会に出て、未来になにが起こるか分からないというときに、是非この経験を思い出しただけだと思います。…」と激励の言葉を述べられました。

続いて、卒業成績優秀者へ「長井長義賞」が、日本薬学会中国四国支部から、

同学会での研究発表内容の優秀な学生へ「学生発表奨励賞」が、教育・研究・社会貢献・課外活動において顕著な功績をあげた学生へ「学部長特別表彰」および「学部長表彰」がそれぞれ授与されました。（各受賞者氏名はP8に記載）

新入生研修オリエンテーション

薬学部学生委員長

難波 康 祐

Namba Kosuke

2023年4月5日（水）に新入生研修オリエンテーションを行いました。コロナ禍のため、2020年度の新入生から長らく研修オリエンテーションを中断していましたが、ようやく3年ぶりに開催できました。午前部では、砂漠に不時着した際に必要となるアイテムに優先順位を付けるというコンセンサスゲームを行いました。班のメンバーと話し合うことでより正解に近づくことを

体験し、話し合うことの重要性を実感しました。各クラスの担当教員と一緒に昼食（お弁当）を取った後、午後の部はコンセンサスゲームの結果発表と表彰式から始まり、1位から3位までのクラスには景品としてお菓子の詰め合わせを贈呈しました。その後、「大学生活を充実させるための行動」という題目についてクラスのメンバーとKJ法を使って話し合い、その内容をまとめて班ごとに発表してもらいました。大学では色々なことにチャレンジしたいという新入生の皆さんの意気込みが伝わりました。また、筋トレを頑張りたいという意見が多かったのも印象的でした。その後解散となりました。



たが、アンケートでは100%の新入生が研修オリエンテーションに満足したと回答しており、また「楽しかった」、「他の新入生と仲良くなれた」、「先輩や先生と交流が深められた」という意見が多く、大学生活への不安が解消できたようでした。最後に、オリエンテーションにご尽力いただいた学生委員の先生方、事務職員の方々、チューター学生の皆様に感謝申し上げます。

レーゲンスブルク大学への研究留学

ドイツ・レーゲンスブルク大学 留学体験記



機能分子合成薬学分野 博士後期3年

小林 大志朗

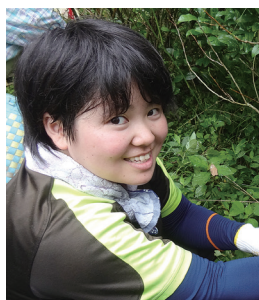
Kobayashi Daishiro

私は日本学術振興会・若手研究者海外挑戦プログラムにご支援いただき、2022年10月から半年間ドイツ・レーゲンスブルク大学に留学しました。本派遣では自身が専門とするペプチド化学から分野を変え、フォトレドックス触媒による光反応開発に従事しました。そのため、基本的な実験手技や考え方、着目する論文など、そのすべてが日本での研究活動とは異なり、凝り固まっていた自身の思考にテコ入れが出来たと感じています。また私生活面では英語に苦勞し、意外と研究の議論よりも同僚とのたわいもない世間話に難しさを感じました。会話の中で飛び交うスラングや若者言葉など、普通に勉強していても出会うことのないワードが多く、さらに派遣先

ドイツではドイツ語も混じっていたためはじめは困惑する毎日でした。しかし、最後には多くの仲間と円滑に談笑できるまでになり、本派遣を通して、海外の方々とのコミュニケーションをとりつつ、協力しながら研究に取り組む力が大きく培われたと感じています。研究において他者との協力関係は必要不可欠であり、その手を世界中に伸ばしていける自信がついたのは自らの大きな強みとなると確信しています。なお、本留学は派遣先機関との共同学位・コチュテルプログラムの一部であり、私の学位審査では Oliver Reiser 教授も含めた教授陣に対する英語での口頭発表を予定しています。末筆ながら、本派遣にご協力いただいた関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

うずしおプロジェクトに採択されて

徳島県産の未利用天然資源の有効利用法を開発する



生薬学分野 博士後期課程2年

高橋 朔良

Takahashi Sakura

阿波晩茶は徳島県の特産品で、世界的にも珍しい微生物発酵茶です。その製造過程で生じる「茶汁（茶葉の漬け汁）」は、未利用で廃棄される天然資源です。私は研究室に配属後すぐに、上勝町の阿波晩茶農家のコミュニティに参加し、茶摘みからはじまる一連の製造工程を体験させていただきました。ここでは、農家の方々（最年少が60代）の元気の良さと凄まじいスピードで行う茶摘み作業に圧倒されました。一方、生産地における高齢化の現状や後継者不足などの問題を痛感し、「茶汁」の有効利用法を開発することで、阿波晩茶の文化継承、さらには地域活性化に繋がればと考え、本研究に着手しました。

本研究では、私の強みである天然物探索研究を軸とし、挑戦的・融合的研究の発展を目的とするうずしおプロジェクトを通して、「茶汁」成分の生物活性評価、ならびにそのメカニズム解明へと発展させ、「茶汁」の有効利用法を開発したいと考えています。

なお、阿波晩茶の製造体験時の様子につきましては、徳島大学広報誌『とくtalk』2023冬号（No.190）でも紹介しておりますので、ぜひご覧ください。



サークル紹介

Peer Communication Club の活動について



薬学部薬学科3年

中 嶋 仁 美

Nakashima Hitomi

私たち、Peer Communication Clubは現在13名が在籍しており、薬学部のセミナー室で毎週水曜日の昼に活動しています。昼食時に英語でコミュニケーションをとるという活動形式上、コロナ流行時は活動が難しかった時期もありました。しかし、3月には1年ぶりに卒業生の送別会も開催することができました。

5月にコロナの感染症法上の分類が5類に移りましたので、今後は感染対策を取りつつ活動をより活発にしていきたいと思っています。

私たちのサークルの特徴として、参加の気軽さと先輩後輩関係なく仲良くするところがあげられます。サークル参加を

強制されることはなく、いつでも好きな時に活動場所であるセミナー室に来れば誰かと自由に会話することができます。

現在は1年生と2年生がいない状態ですが、私自身途中からサークルに参加したので、どんな学年であっても、いつからでも参加してくれる方がいらしてくれと嬉しいです。

最後になりますが、いつも私たちの活動を支援し、応援してくださっている皆様、本当にありがとうございます。今後とも活動に励んでまいりますので、よろしく願いいたします。

薬学部年間行事予定

令和5年8月～令和6年3月

令和5年

8月5日(土)～31日(木)	夏季休業
8月7日(月)	オープンキャンパス
10月2日(月)	後期授業開始
10月21日(土)～22日(日)	蔵本祭
11月2日(木)	開学記念日
12月9日(土)	薬学共用試験 OSCE
12月22日(金)	薬学共用試験 CBT

令和6年

1月13日(土)～14日(日)	大学入学共通テスト
2月25日(日)～26日(月)	一般入試(前期日程)
3月12日(火)	一般入試(後期日程)
3月22日(金)	卒業式・修了式
3月25日(月)～31日(日)	学年末休業

薬学部関連ニュース

教員の異動

令和5年1月31日付退職	医薬品情報学分野	山本 清威 助教	令和5年3月31日付退職	薬物動態制御学分野	異島 優 准教授
令和5年3月31日付退職	創薬生命工学分野	伊藤 孝司 教授	令和5年4月1日付採用	薬物動態制御学分野	安藤 英紀 准教授
令和5年3月31日付退職	機能分子合成薬学分野	根本 尚夫 准教授	令和5年4月1日付採用	臨床薬学実務教育学分野	川田 敬 助教
			令和5年4月1日付採用	臨床薬学実務教育学分野	山本 高成 助教

学会賞等受賞

【教員の受賞】

■徳島大学若手研究者学長表彰

受賞者：安藤 英紀
 受賞年月日：令和4年12月15日
 表彰団体名：徳島大学

■康楽賞

受賞者：竹内 政樹
 受賞年月日：令和5年2月7日
 表彰団体名：公益財団法人康楽会

■大学院医歯薬学研究部長表彰

受賞者：安藤 英紀
 受賞年月日：令和5年3月13日
 表彰団体名：徳島大学大学院医歯薬学研究部

■第17回(2023年度) タケル&アヤ・ヒグチ記念賞

受賞者：石田 竜弘
 受賞年月日：令和5年5月17日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬剤学会
 受賞内容：薬剤学・製剤学分野における研究業績

■2023年度日本薬剤学会奨励賞

受賞者：安藤 英紀
 受賞年月日：令和5年5月17日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬剤学会
 受賞内容：腹膜播種治療を旨とした臨床応用可能な腹腔内投与型核酸医薬製剤の開発

【学生の受賞】 (学年は受賞時)

■22nd International Symposium on Advanced Fluid Information (AFI-2022) Best Poster Presentation Award

受賞者：酒巻 祐花(M1)
 受賞年月日：令和4年11月10日
 表彰団体名：東北大学流体科学研究所
 受賞内容：Visualization of Extracellular Vesicles Transport Across Brain Microvasculature on a Human 3D Blood-Brain Barrier Chip

■第142回日本薬理学会近畿部会優秀発表賞

受賞者：山下 竜介(B6)
 受賞年月日：令和4年11月12日
 表彰団体名：第142回日本薬理学会近畿部会
 受賞内容：低酸素がん微小環境におけるPARP活性化は5-FUによる腫瘍細胞増殖抑制効果の減弱に寄与する

■優秀ポスター賞

受賞者：森口 一平(B6)
 受賞年月日：令和4年11月25日
 表彰団体名：(公社)日本分析化学会フローインジェクション分析研究懇談会
 受賞内容：デジタルマイクロスコブを用いる液滴の動画撮影・測色検出法の開発とリン酸イオン定量への応用

■ポスター発表優秀賞

受賞者：山本 遥香(B4)
 受賞年月日：令和4年11月27日
 表彰団体名：日本抗体学会
 受賞内容：不活化ヒトTNF α 誘導体のマウスへの免疫による中和抗体の誘導評価

■15th International Symposium on Nanomedicine (ISNM2022) The Best Poster Award

- 受賞者：川口 桂乃(D2)
 受賞内容：Transfusion of mouse B cells, embedded antigens with hydroxyl PEG-modified liposomes in vitro, induces cellular immune responses in mice
- 受賞者：山本 遥香(B4)
 受賞内容：Induction of neutralizing antibodies by immunization with inactivated human TNF- α in mice
- 受賞年月日：令和4年12月7日
 表彰団体名：日本ナノメディスン交流協会

■15th International Symposium on Nanomedicine (ISNM2022) The Poster Award

- 受賞者：Eslam Ramadan Mostafa Abdelhameed(M2)
 受賞内容：Preparation, optimization, and evaluation of anionic DPPG-based LNPs for delivery of peptide antigens
- 受賞者：橋本 愛子(B5)
 受賞内容：Differential organ-specific distribution of human serum albumin denatured by various modifications

受賞年月日：令和4年12月7日
 表彰団体名：日本ナノメディスン交流協会

■2022年度第61回日本薬学会中国四国支部学生発表奨励賞

- 受賞者：藤原 達也(B4)
 受賞内容：不斉ベンゾイン反応におけるキラルNHC触媒の遠隔位電子効果
- 受賞者：川田 航大(M1)
 受賞内容：Nagelamide Qの全合成研究
- 受賞者：村井 あきほ(M1)
 受賞内容：ZTPの化学合成とRNAポリメラーゼに対する基質認識能の評価

受賞年月日：令和5年1月28日
 表彰団体名：日本薬学会中国四国支部

■徳島大学学生表彰

受賞者：山本 遥香(B4)、坂上 祐貴(B4)
 森口 一平(B6)、林 隼矢(M1)
 山本 舜人(M1)、左東 大輝(D1)
 山本 有希(D1)
 松尾 アモリウムクリスティーナ菜(D2)
 高田 春風(D3)

受賞年月日：令和5年3月10日
 表彰団体名：徳島大学

■学部長表彰

<長井賞>

受賞者：松村 亜美(B6)、大平 実佳(B4)

<語学マイレージプログラム>

受賞者：大平 実佳(B4)、倉橋 沙希(B4)
 平澤 萌(B4)、今井 健(B4)
 住田 龍一(B4)

受賞年月日：令和5年3月23日
 表彰団体名：徳島大学薬学部

■学部長特別表彰

<実務実習 成果発表 優秀ポスター賞>

受賞者：松村 亜美(B6)、岡林 春花(B6)
 岡本 麻里衣(B6)、大塚 ちほ(B6)
 山下 竜介(B6)、新田 真友(B6)

受賞年月日：令和5年3月23日
 表彰団体名：徳島大学薬学部

■日本薬学会第143年会 学生優秀発表賞(口頭発表の部)

- 受賞者：角南 尚哉(B6)
 受賞内容：悪性リンパ腫に対するオキサリプラチン封入PEG修飾リポソームと抗体医薬の併用による抗腫瘍効果の検討
- 受賞者：中村 天太(D2)
 受賞内容：Calyciphilins Gの全合成研究
- 受賞者：川田 航大(M2)
 受賞内容：Nagelamide Qの全合成研究
- 受賞者：山本 璃子(B6)
 受賞内容：1,3a,6a-トリアサベンタレン類の合成と光応答型細胞毒性の評価

○受賞者：山口 美穂(M2)
 受賞内容：ムキチ酸の構造簡略化体の開発研究

○受賞者：左東 大輝(D2)
 受賞内容：連続アシル転移を利用した分子内および分子間スレオニ側鎖アシル化法の開発

○受賞者：藤原 達也(M1)
 受賞内容：不斉ベンゾイン反応におけるキラルNHC触媒の遠隔位電子効果

○受賞者：網藤 惇(D3)
 受賞内容：ヒト胎盤栄養膜細胞(BeWo細胞)におけるクレアチンプロドラッグ輸送機構の解明

○受賞者：谷澤 輝嗣(B6)
 受賞内容：抗ヒト脳微小血管内皮細胞抗体の標的受容体の探索

○受賞者：大西 恭弥(D3)
 受賞内容：Dynamin依存性エンドサイトーシス阻害はマクロピンノサイトーシス活性化を介してAAVベクターの細胞内取り込みを促進する

受賞年月日：令和5年4月25日
 表彰団体名：日本薬学会

■日本薬剤学会永井財団 大学院学生スカリシップ

受賞者：福田 翔一郎(D2)
 受賞年月日：令和5年5月16日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬剤学会
 受賞内容：イオン液体を基剤とした難吸収性分子化合物の腸管吸収改善の検討

■「薬と健康の週間」感賞論文 第1席

受賞者：山下 七夢(B2)
 受賞年月日：令和5年5月17日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬剤学会
 受賞内容：薬剤師過剰時代：薬剤師が生き残るための方法と志向—薬学生の立場から—

■「薬と健康の週間」感賞論文 第2席

受賞者：西原 鈴音(B2)
 受賞年月日：令和5年5月17日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬剤学会
 受賞内容：薬剤師過剰時代：薬剤師が生き残るための方法と志向—薬学生の立場から—

■日本薬剤学会永井財団 学部学生七つ星薬師奨励賞

受賞者：山本 遥香(B5)
 受賞年月日：令和5年5月17日
 表彰団体名：公益社団法人日本薬剤学会
 受賞内容：抗ヒトTNF α 抗体の生体内誘導を実現するTNF α 由来ペプチドの免疫と抗体誘導評価

※注釈：氏名の右横の()内のアルファベットは、
 B=学部生、M=博士前期課程、
 D=博士後期課程・博士課程を指します。

発行：徳島大学

編集：薬学部広報委員会

広報委員：山崎 哲男、藤野裕道、植野 哲、稲垣 舞

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、令和5年12月頃を予定しております。

URL：https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/
 〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1
 徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係
 E-mail：isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp